

資料紹介 Data

「因州東照宮祭礼御予参行列図巻」

来見田博基

〒680-0011 鳥取市東町2丁目124 鳥取県立博物館

E-mail: kurumidah@pref.tottori.jp

[受領 Received 16 January 2008 / 受理 Accepted 19 January 2008]

The Scroll showing Tottori domain's procession during the Inshu Toshogu shrine festival

Hiroki KURUMIDA

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

キーワード：鳥取藩，御旅所，持槍，大名行列，樗谿神社，池田家

はじめに

ここに紹介する鳥取藩の行列図巻は、今年度寄贈を受けた「旧鳥取藩士野田家資料」のなかの一点である。すでに平成19年7月から9月までの間、常設展示室の「歴史の窓」で展覧に供している。本稿では、後述する図巻の性格から、この資料の名称を「因州東照宮祭礼御予参行列図巻」（以下からは「行列図巻」と略称する）とする。

これまで鳥取藩の大名行列について記したのものには、供揃を文字で示した行列書<sup>1)</sup>などが知られるが、行列のみを絵図化した資料は、今のところ「行列図巻」以外には確認されていない。<sup>2)</sup>

本資料は、鳥取藩の大名行列を考えるにあたって重要な資料になると思われるので、写真とともに内容を紹介し、関係資料と付き合わせて得られた知見をあわせて報告したい。

一. 「行列図巻」の概要

現状は、前半部と後半部の二巻に分割されている。元々は、一巻につながっていた可能性もあるが、明らかではない。ちなみに、各巻の端裏にある書き込みから、昭和初期の段階には、すでに今の状態になっていたようである。<sup>3)</sup>

料紙は、やや厚手の和紙を横に貼り継いでおり、表装はなされていない。一巻目に、絵にかかるほどの大きな破損があるほか、全体的に和紙そのものがやや劣化している。寸法は二巻とも、縦が10cm、横が284cmとなっている。

行列は先頭から最後尾まで、紙面を右から左に進むように描かれている。人物は、約3cm前後と小さいが、一人ひとりには薄い絵具で彩色が施されている。筆致はやや粗雑である。制作者名、制作年代、制作目的などに関する書き込みはなく、行列の各部分に役職名や人物名などの文字情報が書き込んであるのみである。

駕籠に乗った人物を一名として換算すると、423名が描き込まれているが、「行列図巻」には欠失部分があるため、この数字は行列の総人数ではない。欠失部分が目視で確認できるのは、人物が途中で切れている二巻目の前部分である。そのほかの欠失については後述する。

以上から、「行列図巻」の文字情報をもとに作成した行列の構成（表1）を、次頁に示しておく。

二. 行列の時期と目的

記された役職名、人物名を手掛かりに、ここでは「行列図巻」の行列が組まれた時期を明らかにし、さらには何を目的とした行列なのかを検討したい。

本資料中で、人物名と役職名が付されているのは、駕籠か馬に乗る人物たちで、その人数は11名である。在職期間と知行高を一覧にしたものが（表2）である。11名の役職者が重なる時期は、1851（嘉永4）年12月11日から1853（嘉永6）年5月22日までの間である。さらに、11名が一同に出揃って、藩主の行列に加わることができるのは、江戸であれ、鳥取であれ、同じ場所にいる期間であり、個々人の動きを追えば、さらなる時期の絞り込みが可能である。そこで鳥取藩政資料の

表1 行列の構成

番	行列の内訳	人数	資料	
1	(御供)	2	一 巻 目	
2	御打物	2		
3	御中小姓	2		
4	御近習	39		
5	表小姓			
6	御徒士頭			
7	御鉄炮奉行			
8	御弓奉行			
9	御馬奉行			
10	御八人			
11	御供目附			
12	押			1
13	部屋頭			1
14	御道具	6		
15	御笠持	2		
16	御草履	1		
17	御坊主	2		
18	御茶弁当	1		
19	台持	1		
20	手代	1		
21	金御紋跡御箱	4		
22	箕箱	2		
23	小使	2		
24	足輕	2		
25	部屋頭	1		
26	御駕	1		
27	御六尺	16		
28	御召替御馬	7		
29	御近習若党	12		
30	表小姓同			
31	惣御供之草履取	80		
32	御供箱	20		
33	御供鎗	6		
34	御用馬	2		
35	御用馬	2		
36	轡(杏)籠	2		
37	合羽籠	12		
38	御用人吉村牧右衛門	19		
39	引馬	5		
40	跡押	1		
41	御用人平井十兵衛	18		
42	跡押	1		
43	(御供)	6	二 巻 目	
44	跡押	1		
45	御用人岡村喜兵衛	18		
46	跡押	1		
47	御勤役井尻庄助	17		
48	跡押	1		
49	御勤役藤井熊太夫	17		
50	跡押	1		
51	御奏者隠岐久兵衛	17		
52	御奏者井上三郎兵衛	17		
53	押	1		
54	御目附洞昇	17		
55	御近習菅沼源次郎	11		
56	御近習大嶋慎蔵	11		
57	御家老池田式部	4		
58	徒士	7		

423

( ) は人物のみ描き、役割の記載がないもの。

「藩士家譜」, 「御用部屋日記」, 「江戸御用部屋日記」, 「御国日記」などを手がかりに、11名の居場所を確認していった結果、藩主と11名が揃うことが可能なのは、藩主が鳥取に滞在中の1854(嘉永5)年閏2月16日から9月26日までの約7ヶ月間とわかった。

さらに時期を推測する手掛かりとなるのが、供奉する家臣ではただ一人、駕籠に乗っている吉村牧右衛門である。そこには「御用人吉村牧右衛門老人二而駕被成御免」との説明が加えられている。吉村は、本来、騎馬で供奉すべきところ、この行列では特別に駕籠に乗ることを許されていた。実は、こうした処置には、藩の取り決めがあったようである。『因府録』の「殿様御予参御供の次第」という項目に、騎馬の家臣が、年齢によっては駕籠を許される取り決めがあったことが、以下のように記されている。

予参の面々ハ何れも騎馬の事。但し七十以上の者は駕籠御免。尤も御耳に達し、御家老中御着座の面々にても、痛所等有之、帰路駕籠に乗申候節は、御目付役へ申達し候事なり。<sup>4)</sup>

「殿様御予参御供」とは、因州東照宮(現榑谿神社)の祭礼行事に関わる藩主の行列を指す。ここで簡単に、因州東照宮の祭礼と藩主の行列について紹介しておく。東照宮の祭礼は、例年4月か9月の17日に催され、東照宮の神輿が、御旅所のある城下町郊外の古海河原までを巡幸した。藩主は、この神輿を御旅所で出迎えるため、行列を整えて、御旅所へ先回りした。鳥取藩では、これを「御予参」と称している。

以上のことから、想定されるのは、吉村が駕籠を許されたのが、嘉永5年の「御予参御供」においてであった可能性である。そして次の記録によって、その事実が確認できる。

一吉村牧右衛門儀、来ル十七日御祭礼之節、御旅所え之御供相勤候処、七拾歳罷成、馬上致難儀候に付、駕籠二而御供相勤度旨、申達候付、御目付を以申上候上、其段同人え申渡之。<sup>5)</sup>

70歳になった吉村が、騎馬で御供するのは容易ではないので、御旅所まで駕籠に乗ることを、藩が許可したことを示す記事である。これにより、「行列図巻」の描かれている時期と目的とは、次のように特定されたことになる。

この「行列図巻」は、嘉永5年9月17日に行われた因州東照宮の祭礼において、御旅所へ向かう藩主の「御予参」行列を描いたものである。資料の名称は、これによって「因州東照宮祭礼御予参行列図巻」とした。ちなみに、このとき「御駕」に乗っている藩主は、若干16歳の12代池田慶徳である。

表2 「行列図巻」に描かれた人物の在職期間と石高

	名前	役職	在職期間	知行高
1	吉村牧右衛門	御用人	天保8年8月～嘉永6年5月22日（隠居）	250石→600石（嘉永3.12）
2	平井十兵衛	御用人	嘉永元年7月～安政2年9月（死去）	180石→300石（弘化3）
3	岡村喜兵衛	御用人	嘉永4年4月～安政元年11月	500石
4	井尻庄助	御勤役	弘化4年7月～万延元年10月（隠居）	350石
5	藤井熊太夫	御勤役	嘉永4年12月11日～慶応3年12月（隠居）	300石→350石（嘉永2.12）
6	隠岐久兵衛	御奏者	嘉永4年9月27日～文久3年5月か	250石
7	井上三郎兵衛	御奏者	嘉永4年8月22日～安政2年12月か	600石
8	洞昇	御目附	嘉永元年10月～安政2年7月	350石
9	菅沼源次郎	御近習	天保14年12月～安政元年正月	60俵5人扶持（嘉永2年より）
10	大嶋楨蔵	御近習	弘化元年9月～安政2年2月	200石
11	池田式部	御家老	嘉永2年12月～文久元年2月	3000石

『鳥取藩史』6, 鳥取藩政資料「藩士家譜」をもとに作成

### 三. 「行列図巻」の欠失部分について

「御予参」行列であることが確かめられたことで、次に「行列図巻」の欠失部分について検討を加え、行列の全体像について考察したい。

まずは、行列の構成に注目する。行列は、おおむね以下のようなまとまりになっている。

- (1) 藩主を中心に、護衛の家臣たちと道具類を持って随従する武家奉公人たちの行列。

（表1では1～37番）

- (2) 騎馬の家臣と、それに随行する武家奉公人の行列。

（表1では41と42番、45と46番など）

騎馬の家臣たちは、藩主の側近で、全員が複数の武家奉公人を引き連れて、行列に供奉している。たとえば、御用人平井十兵衛が引き連れている奉公人は、役割ごとにみていくと、供侍（7名）、馬取（2名）、鎗持（2名）、立笠持（1名）、挟箱持（2名）、馬柄杓持（1名）、合羽籠（2名）、跡押（1名）の合計18名である。奉公人の数はそれぞれの役職ごとに、御用人が18名（吉村牧右衛門は、駕籠のため例外として扱う）、御勤役が17名、御奏者と御目付が16名、御近習が10名と定数が決められていたようである。

こうした行列構成の規則性をふまえると、欠失している部分、表1でいえば43番の前には、騎馬の家臣がいたことが推測できるであろう。さらに、二巻目の最後尾に位置する家老池田式部は、その格式から考えて、数十人規模の家来（藩主からは陪臣）や奉公人を引き連れている可能性が高い。つまり、現在図巻上で確認できる池田式部の行列に描かれている御供は、行列のほんの先端部分に過ぎず、式部本人を含めた本隊が後ろに控えていたと思われる。

また、一巻目についても、見た目ではなかなか判断しにくいのが、前が切れている可能性がある。この点については、行列書との比較から検討してみたい。参考にする行列書は、1865（慶応元）年4月17日に行われた「御予参」行列のものである。ここでは『贈従一位池田慶徳公御傳記』に掲載の図をそのまま転載した（図1）。表記方法はもとより、時期や職制も「行列図巻」と異なるため、単純な比較はできないものの、全体の行列構成はさほど変わっていない。

ここで注目するのは、「行列図巻」一巻目の先頭に描かれている「御打物」である。これは長刀のことで、刀身は花色羅紗地の袋に入れられたが、行列書でこれに相当するのは、表記こそ違おうが「御薙刀」であろう。（図1）をみると、「御薙刀」の前には、御押、御口、御先馬、杓籠、御先箱、白天目、御参内傘、御徒、大鳥毛が先行しており、いずれも「行列図巻」には描かれていない。したがって、「行列図巻」の一巻目には、「御打物」より前の御供が描かれていた可能性があり、現在は欠失していると考えられる。

以上の検討から、「行列図巻」には欠失部分が少なくないことがわかってきたが、可能な限りにおいて、当日の行列供奉者を明らかにしておきたい。藩政資料のなかに、「御予参」に参加した総人員を記した記録は見いだせなかったが、重臣については、次の資料から明らかにすることができた。

#### (A) 「御用部屋日記」（嘉永5年9月14日条）

一来ル十七日御祭礼之節、左之面々御旅所之御供相勤候付、古海馬建之儀例之通申付候様御参詣奉行え申遣ス。

吉村牧右衛門

平井十兵衛

田村甚左衛門

岡村喜兵衛

表3 嘉永5年9月17日の「御予参」行列に参加した重臣

	人物名	役職	行列図巻	Aの資料	Bの資料
1	吉村牧右衛門	御用人	○	○	○
2	平井十兵衛	御用人	○	○	○
3	岡村喜兵衛	御用人	○	○	○
4	井尻庄助	御勤役	○	○	○
5	藤井熊太夫	御勤役	○	○	○
6	隠岐久兵衛	御奏者	○	○	○
7	井上三郎兵衛	御奏者	○	○	○
8	洞昇	御目附	○	○	○
9	菅沼源次郎	御近習	○	○	
10	大嶋楨蔵	御近習	○	○	
11	池田式部	御家老	○		○
12	池田兵庫介	御家老			○
13	田村甚左衛門	御用人		○	○
14	伊木久右衛門	御側役		○	

※行列の表記は、罫線間を一行とし、右から左へ丸囲みの番号順につながる。なお番号のみ筆者が補った。

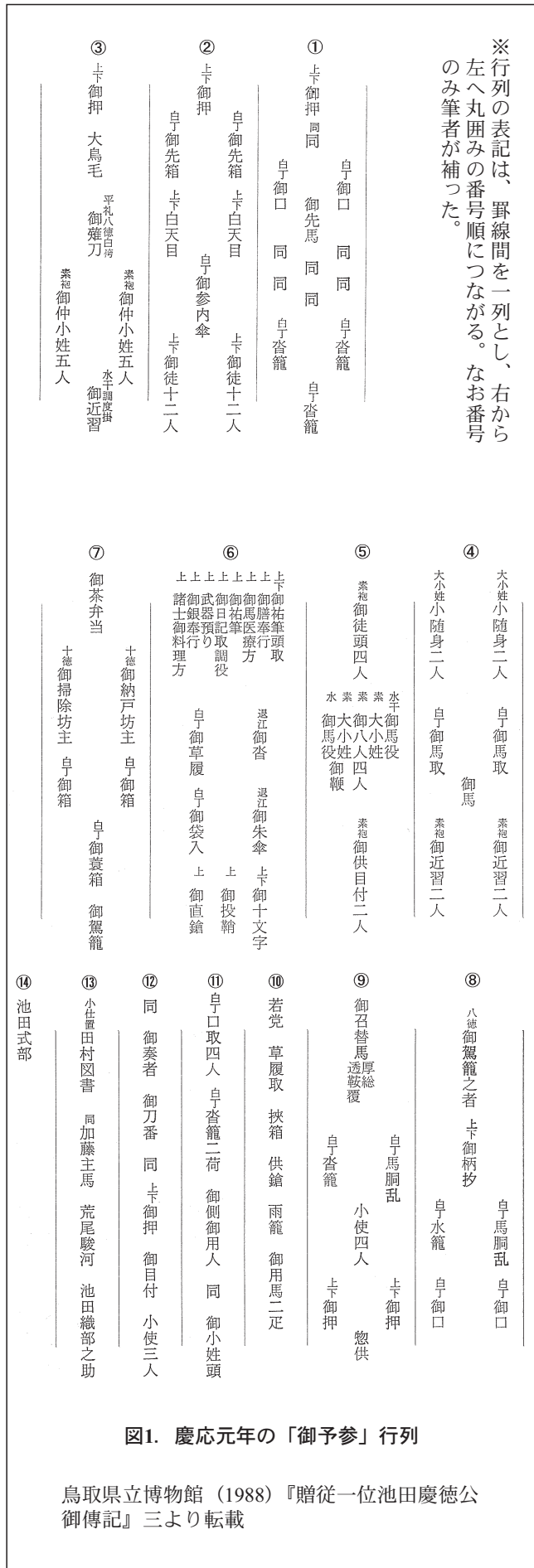


図1. 慶応元年の「御予参」行列

鳥取県立博物館 (1988) 『贈従一位池田慶徳公御傳記』三より転載

御勤役井尻庄介 上同藤井熊太夫  
 御奏者隠岐久兵衛 上同井上三郎兵衛  
 御目付洞昇 御側役伊木久右衛門  
 御跡乗菅沼源次郎 上同大嶋楨蔵

(B) 「御国日記」(嘉永5年9月17日条)

一左之面々御旅所え罷出候、并御目見相済居中、着座以上之嫡子は不及触罷出候事。

荒尾但馬 煩 荒尾小八郎  
 和田織之丞 小八郎悴 荒尾小太郎  
 津田伊織 煩 鶯殿藤輔  
 乾 八次郎 藤輔悴鶯殿藤次郎  
 御供池田兵庫介 在江戸 荒尾千葉之助  
 御供池田式部 荒尾駿河

一御祭礼相済候御飲御家老共御用人を以申上之、且又御旅所え罷出ル着座并御目見相済候着座以上之嫡子登城御勤役を以御飲申上之。其外御旅所え罷出ル寄合以上左之面々儀、登城右御飲御帳二付退去、尤御城詰并軍用役大筒役も罷出ル。

(中略)

御供左之通

御用人 吉村牧右衛門 上同 平井十兵衛  
 御用人 田村甚左衛門 上同 岡村喜兵衛  
 御勤役 井尻庄介 上同 藤井熊太夫  
 御奏者 井上三郎兵衛 上同 隠岐久兵衛  
 御目付 洞昇

(A)と(B)の資料から、「御予参」行列に供奉した重臣は、(表3) のとおり14名と考えられる。このうち「行列図巻」にいないのは、家老池田兵庫介、御用人



田村甚左衛門、御側役伊木久右衛門の3名である。

この3名が行列のどこに位置していたのかについては、次のように推測する。まず田村甚左衛門は、同役の平井十兵衛と岡村喜兵衛の間（表1では42番と43番の間）にあって騎馬で供奉していたと思われる。「行列図巻」では一卷目と二巻目の間の欠失部分にあたる。次に家老の池田兵庫介は、前掲の行列書（図1）をみると、家老および着座家は、行列の最後尾に位置していることから、「行列図巻」では池田式部の後方で、行列の殿に控えていた可能性が考えられる。伊木久右衛門については不明である。

以上から、欠失部分を加えた、行列の全体構成は（図2）のように推測される。

御押、御口、御先馬、杵籠、御先箱、白天目、御参内傘、御徒、大鳥毛など	欠失
「行列図巻」一卷目	現存
田村甚右衛門の行列 伊木久右衛門の行列？	欠失
「行列図巻」二巻目	現存
池田式部の行列後半 池田兵庫介の行列	欠失

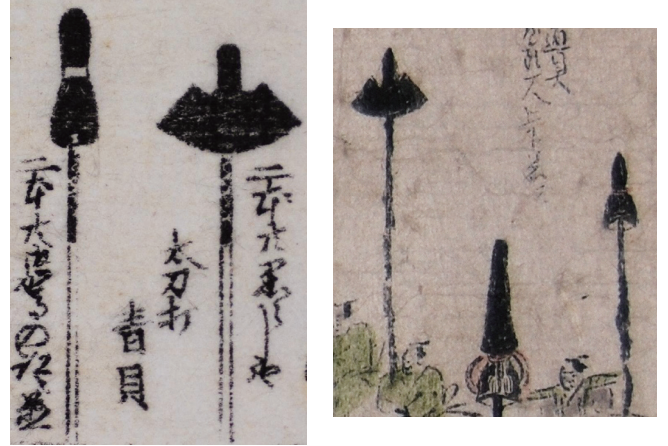
図2. 「行列図巻」全体の構成（推定図）

四. 「行列図巻」の特徴 — 道具類と服装 —

「行列図巻」では、奉公人が担いでいる道具のかたちや、身に纏う服装の色や模様などが細かく描いてある。ここでは、「行列図巻」の資料的な価値を高める意味でも、制作者が行列をどの程度忠実に描いているのかを確かめておきたい。ただし、当時使用されていた道具類や衣装は伝わっていないので、二次資料との比較において検証する。なかでも、行列の威儀と家格を示す「御道具」とも呼ばれた二本の鎗、藩主の駕籠を担ぐ「御六尺」たちの衣服、そして重臣たちの持鎗についてみていく。

鳥取藩の道具類を描いた資料は多くないが、そのな

かから嘉永4年の『大成武鑑』<sup>9</sup>を参考にしたい。『大成武鑑』には（写真1a）のように、二本の鎗鞘が載っている。鞘には「二本共黒らしや」とある。「行列図巻」（写真1b）と比較してみると、形状や色は相似している。



左：写真1a（『大成武鑑』部分）  
右：写真1b（「行列図巻」部分）

なお、『大成武鑑』には「二本共御駕の跡二並」とあって、鳥取藩の格式では、二本の鎗は駕籠の後ろに並ぶことになっているが、「行列図巻」では位置が前後している。これは、藩領の内と外で順序に手が増えられていたことを示唆している。

『大成武鑑』には「御六尺」が纏う衣服についての情報も載っている（写真2a）。そこに「かんばん 地こん 紋白 五所」とある。「かんばん（看板）」は、「御六尺」の着ている短い衣服のことで、紺地で5カ所に白抜きの家紋が染め抜かれている五つ紋の意であろう。（写真2b）は「行列図巻」にある「御六尺」の姿である。短い衣服は紺色ではないが、袖と背中に、そつ

左：写真2a（『大成武鑑』部分）  
右：写真2b（「行列図巻」部分）

